チートサイヤ人がダンジョンにいるのは間違っていますか？

ぽた焼き改

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様（オッサン）にサイヤ人（チート）をもらってダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうかの世界で無双＆ａｍｐ；ハーレムがある主人公最強、しょせん俺ＴＵＥＥＥＥＥの物語であります！

駄作に駄文、台本形式でお贈りしていますのでご理解お願いいたしますｍ（＿＿）ｍ

それでもいいという穏やかな心をお持ちのサイヤ人様はどうぞよろしくお願いいたします（＊≧∀≦＊）作者は嬉しさのあまり、フンフンダンスを踊っている事でしょう

激しい怒りによって目覚めた伝説の戦士様（つまんないと思った方）はブラウザバックという名のサイヤ人用ポッドがありますのでそちらに乗ってお帰り下さいｍ（＿＿）ｍ

目　次

第１話　異世界転生ってマ？　―――――――――――――――　1
第２話　特典？決まってる・・・俺を不老不死にしｒ　―――――――　7
第３話　修業じゃぁぁあ！あっ・・・無理ｋ　―――――――――――　13
第４話　憧れの存在悟空さんとの修業開始！その１　―――――――――　18
第５話　悟空さんとの修業その２！修行はツライよ・・・　―――――――　26
第６話　いきなりの戦闘!?ちょっ!?まっ!?　―――――――――――――　32

第1話　異世界転生ってマ？

???「目覚めよ・・・少年よ・・・目覚めよ・・・」

声が・・・声が聞こえる・・・俺を呼ぶのは・・・誰だ？

???「さぁ・・・目覚めるのだ・・・少年よ・・・」

俺を呼ぶ声がする・・・よし・・・

俺は寝ていたであろう上半身だけバッと起き上がり、瞑っていた眼を開いて目前の人物を見た

・・・なんか、オッサンがいるんだが・・・

するとオッサンは俺が眼を覚ましたのに気が付き、声を掛けようとした

オッサン「おぉ！目覚め「何だ夢か。んだよ・・・夢見るんだったら可愛い女の子の夢を見ろよ俺」ってちょいちょいちょいちょいちょい!?寝るな寝るな!?」

夢に出てきたオッサンは再び寝ようとする俺を止めようと制止の声を掛けるが残念だったな！

俺「Ｚｚｚ・・・」

オッサン「早っ!?寝るの早っ!?ちょっ!?待って!?ねぇ君!?起きて!?お～い!?ちょっと～!?!?!?」

多分1時間後・・・クルッポークルッポー

俺「んぅ・・・あぁぁあ!・・・・ふあぁ・・・良く寝たわぁ～ゴキッゴキッ」

オッサン「・・・・・・ほんと良く寝たね？君・・・」

俺「ん？あれ？夢で見たオッサンじゃないですか・・・とりあえず、おはようございます」

オッサン「あっはい、おはようございます・・・じゃないよ!!」

おぉ・・・オッサンが乗りツッコミしてる・・・

オッサン「したくて言ったんじゃないよ!!」

っ!?バカな・・・俺の心の声が聞こえるだと・・・？

オッサン「そりゃそうさ！なんたって僕は神様だからね！」

嘘つけ・・・どこにビールっ腹の半そで白シャツの青と白の縞パンツ履いたバーコードハゲのオッサンが神様なんだよ

あんた言われた事ない？年頃の娘に「お父さんの服と私の服を一緒の洗濯機に入れないで」って冷たい眼をしながら言われた事ない？

そう言った瞬間、オッサンはガクッと膝を着きながら

オッサン「何で分かったんだよぉぉおお!?うぉぉおおん!!レオナァァアア!!」

と言いながら泣き叫んでいた・・・

１つ分かった事は、このオッサンの娘の名前がレオナだと言う事だな（全然関係ない）

１０分後クルッポークルッポー

オッサン「グスッ・・・恥ずかしい所を見せてしまったね」

俺「ほんとですよ、オッサンの号泣シーンなんて誰得なんですか」

オッサン「いや元々君のせいだからね!?僕の１番の悩みを当てて号泣させた君のせいだからね!?!?!」

俺「え～・・・でも、思春期の子ましてや女の子じゃ尚更普通の反応じゃないですか?世の中のお父さんが必ずしも通る道ですよ」

オッサン「だけどね?僕を目の前にしながら普通言うかい?昔は「私、大きくなったらお父さんと結婚する～」なんて言ってくれていた子があんな冷たい眼をした子になるなんて・・・」

俺「それが思春期ってもんなんすよ!てか、ここはどこなんです?何でなにもないの?」

オッサン「ハッ!?そ、そうだったそうだった!!ん!ん!ん!!・・・目覚めし人の子よ・・お前を呼んだのは他でもな「いや、もう素を知ってるんで今頃神みたいな言葉を言わなくてもいいですよ?」・・・チェッワカッタヨ」

俺「聞こえてる聞こえてる」

オッサン「ゴホンッ!・・・ここは生と死の狭間、まぁいわゆる境界線って所だよ」

俺「生と死の狭間・・・という事は俺は・・・」

死んだって事か・・・マジで？

オッサン「マジマジ！」

うるさいよオッサン

オッサン「酷い!?」

俺「んで？どうして俺は死んだんです？確か俺はコンビニの本の所で立ち読みしてた筈だけど・・・」

オッサン「そうだね、そこに運良く君がいた所に車が突っ込んで事故が起き、本を読んでた君は引かれて死んでしまったんだよ」

あぁ～・・・そうだったんかぁ・・・

オッサン「因みに原因はお年寄りのアクセルとブレーキを間違えた為に起きた事故だったんだ」

うむ・・・なんか、妙にリアリティーがあるなぁ

オッサン「まぁ、現実にもその関連の事故はあるしね？」

おいおい・・・メタ発言はやめぃ!?

オッサン「おっと・・・」

全く・・・それでオッサン・・・神様は何で俺なんかをここに連れてきたの？

オッサン「それはね？本来なら君はまだ死なない年齢だったんだ・・・でも、君は死んでしまった・・・そして、君のいた世界は僕の管轄で」

俺「ズバリ！自分の管轄で不慮の事故が起きた事で貴方はその報告書を書かなくてはいけなくなった。だが、それを書くのは非常に面倒くさい為、いっそ俺を違う世界に転生させちゃえば書かなくもなるし、俺も第２の人生を得られるＷｉｎＷｉｎな結果になると言う事でしょう！」

どこから取り出し装着したか分からないぐるぐる眼鏡を俺はクイックイッとしながら空いた手でオッサンを指差していた（完全に○男である）

オッサン「・・・すっ・・・凄いね君・・・全部正解だよ・・・えっ？もしかして僕の事好きなの？いやぁでも、僕には妻と娘が」

俺「バカな事いってんじゃねぇぞこのハゲ野郎。照れるんじゃねぇよブッ殺すぞ？」

オッサン「す・・・すいませんアーコワカッタ。・・・そ、それで？一応聞くけど君はいいのかい？違う世界に転生しても？僕的にはその方が助かるんだけど」

俺「ん？当たり前じゃないですか！異世界転生・・・密かに憧れてたんですよ!!まさか現実になるなんて！」

オッサンはニコッとしながら「そうかい」と言っていた

オッサン「それでは、改めて神田龍悟君・・・どの異世界に行きた

いんだい？」

神田龍悟・・・生前２１歳独身・・・初異世界に行きます!!

第2話　特典?決まってる・・・俺を不老不死にしｒ

神「さて、早速転生してもらいたいんだけどその前に特典をあげなくちゃね！」

龍悟「うぉぉお!!ＴＯ☆ＫＵ☆ＴＮ!?マジで!?やったぁぁぁあ!!」

神「そ、そんなに喜ぶとは・・・それじゃあ、好きなの言ってね?」

龍悟「分かりました!!それでは遠慮なく・・・俺を不老不死にしろぉぉおおお!!!!」

神「なに言ってるの?バカなの?死ぬの?」

龍悟「女の子に言われるならまだしも、オッサンには言われたかねぇぇぇえ!?」

神「早くバカな事言ってないで決めてくれるかい?あと5分で異世界に行っちゃうからさ?」

ぐぬぬ・・・ハゲオッサンに言われるとは・・・てか、５分!?短くね!?もうちょっと考える時間をですね・・・

神「あと４分しかないよ?」

ぬわぁぁぁあ!?ちきしょぉぉおお!?もう1分もたってやがるぅぅう!?

どうする!?どうする!?

王の財宝!?いや、神話なんて知んねぇし・・・ゴムゴムの実の能力

!?ルフィは確かに好きだけどなんか、違うな・・・九尾の力!?いやいやいや、あんなバケモン俺に操られるかよ・・・

神「大丈夫?あと、1分くらいだけど・・・」

Ｎｏｏｏ　ＯＯＯ!?クソぉぉお!?何で最初にフリーザ様のセリフなんて言っちまったんだよぉぉおお!?

ん?フリーザ様・・・・・・ドラゴンボール・・・・・・・ハッ!?

龍悟「さ、サイヤ人にして下さい!!あとは、修行すればするほど強くなるようになると、精神と時の部屋、無くならない仙豆を下さい!!」

神「うん!分かったよ～・・・あと、超サイヤ人とかはどうする?」

龍悟「あれ?まだ時間あったの?」

神「あと１０秒だよ?９、８、７・・・」

龍悟「のわぁぁあ!?超サイヤ人は４とゴットブルーまでなれるようにおねが「はい!時間切れ～!んじゃ、異世界に行ってもらうね～?」えっ!?ちょっ!?まっ」

すると次の瞬間、俺の身体がキラキラと輝いて薄くなって・・・って薄くなって!?お、オッサン!?

神「心配しないで!最後の願いは叶えたからさ?第２の人生を楽しんでらっしゃい!」

オッサ・・・神様・・・ありがとう!!

神「君に幸あれ・・・」

そうオッサ・・・神が言うと龍悟は綺麗に消えていった・・・

龍悟が消えた後、突然扉がガチャっといいながら開いた

レオナ「あっ！お父さんここにいたんだ？」

神の娘、レオナがやって来た。栗色の長い髪をしており、整った顔立ち・・・所詮は美人と言うやつである・・・なぜあんなオッサンからこんな美人が出来たのか不思議である

神「なんか、誰かに悪意のある説明をされたような・・・」

レオナ「なに言ってるの？お父さん・・・」

と冷ややかな目線を送るレオナさん

神「あぁ～いや、何でもないんだ・・・んで、僕に用事かい？」

レオナ「えっ!?あぁ～・・・ウ～ンと・・・はい、これ・・・」

レオナが何故か顔を背けながら、恥ずかしそうにリボンを付けた袋を渡してきた

神「・・・えっ？これって・・・」

すると、レオナは顔を背けながらも答えた

レオナ「きょ、今日はお父さんの誕生日でしょ？だ、だから・・・その・・・プレゼント作ったの・・・クッキーを・・・」

ごめんね龍悟君・・・先に僕に幸が来てしまったようだ・・・

その時、神は娘からのプレゼントを受け取った後、幸せな顔をしながら気絶した

レオナ「ちょっ!?お、お父さん!?お父さぁぁん!?」

その頃の龍悟君は・・・

龍悟「・・・・・・ぅん?」

知らない天井だ・・・よし!転生したら1番に言いたかった事が言えたぜ!!

龍悟「っと・・・ふむ・・・なんとも古風な家ですなぁ?」

周りを見ると、木の机と椅子に何故かある籠に入ってる果物、天井

には古いランプ・・・えっと、ロウソクを入れるタイプだな！がある

龍悟「取り敢えず果物いただきますか・・・」

俺は机にあった林檎を掴み、シャクッと音をたてながら食べる

龍悟「あっうめぇ！・・・あれ？」

次の果物食べようとしたらなくなってる・・・誰だ!!俺の果物食べた奴は!!!

龍悟「・・・・・俺しかいねぇか・・・」

てか、いつのまに食べたんだ？・・・しかも、まだ足りねぇ・・・腹へった・・・ん？

龍悟「あっ・・・あの仏と書いてある茶色い壺は!!」

俺は勢いよく蓋を開けると緑色の豆がいっぱいあるのを見つけた

龍悟「うぉぉおおお!!仙豆だぁぁあ!!!さっすが神様!!」

さっそく一粒・・・カリッポリッポリッ・・・ゴクンッ

龍悟「うぉっ!?・・・すげぇな・・・一気に腹一杯になったぞ!!」

さて・・・仙豆があるって事は、精神と時の部屋もあるはずだ・・・何処にあるん・・・

「精神と時の部屋」とミミズが走ったような汚い字で書いてある部屋を見つける俺

龍悟「・・・・・・これはないわ」

取り敢えず、何故かあった板と釘と金槌があったので即効で張り替えて字を書き直した

龍悟「ふぅ・・・よし！入るか!!」

俺は意を決してドアを開けた

第3話　修業じゃあああ!あつ・・・無理k

龍悟「おぉ～!!これが精神と時のヘァッ!?」

精神と時のヘァッ!?に入っただけで何で俺、膝をついてるんだ!?てか、おっも!?

龍悟「ぐっ!?・・・ぎぎぎ・・・!?」

ちょっ!?マジで潰れそうなんだけど!?!?

なんで!?なんで!?!?

龍悟「うぐぅ・・・く・・・そぉ・・・!」

こ、こんな所で・・・負けるかぁぁあ!!

龍悟「ま・・・ける・・・かぁぁああ!!」

すると、俺の周りに白いオーラが立ち上り風が吹き上がりながら俺は何とか立った

龍悟「はぁ・・・はぁ・・・くっ!?・・・た、立ってるだけで・・・精一杯・・・だぜ・・・」

だ、だけど・・・なんでこんなに体が重いんだ?あの神様には確か精神と時の部屋しか言ってないのに・・・

???「なんかデケェ気を感じて来てみたら・・・オメェ誰だぁ?」

あれ?・・・なんかどっかで聞いた声だな・・・?てか、俺以外に誰かいたのか!?・・・まぁいいや・・・取り敢えず何か喋らないと・・・

くそっ！なかなか顔を上げられねぇ・・・

龍悟「す、すみません・・・俺・・・は、初めて・・・ここに来た者・・・なんですが・・・くっ!?」

???「んん？・・・なんでオメェ苦しんで・・・あぁ!?わ、わりぃ!?ブルマから作ってもらった重力装置付けてたまんまだった!?ちょ、ちょっと待ってろ!?!?」

その男の人は一瞬でいなくなると次の瞬間、一気に体が軽くなった

龍悟「っ!?・・・かはぁ!?・・・はぁ・・・はぁ・・・も、戻った・・・？」

はぁ・・・はぁ・・・ふぅ・・・早くも物語り終了する所だったぜ・・・

すると、俺の所にさっきの男の人が一瞬で現れた・・・ってえっ？・・・あれ・・・おかしい・・・な、なんで・・・なんで・・・!?

悟空「オッス！オラ悟空!!いやぁ～わりぃわりぃ！オラてっきり1人だと思ってたんだけど、まさかオラ以外にもサイヤ人がいるなんて思ってもみなかったぞぉ!!」

なんでこの精神と時の部屋にあの超有名人の孫　悟空さんがいるのぉぉぉおおおおおおお!!!!!!

龍悟「へぁ・・・ちょっ・・・なん・・・!?」

悟空「ん？どうしたんだ？オメェ??」

や、ヤベェ・・・!?ほ、ほほほ本物の悟空さんだ!!でもなんで!?俺、

悟空さんを呼んでなんて願いしてないんだけど!?!?

悟空「おぉ～い！」

龍悟「ふぁっ!?ご、ごめんなさい!?き、き聞こえてますです!!はい!!ボクイケメン!!」

し、ししまったぁぁぁぁぁ?!?緊張しすぎてついトランクスルーのセリフを言ってしまったぁぁぁ!?

悟空「オメェ何言ってるかわかんねぇぞ??」

悟空さんが眉を八の字にしながら変な奴を見る目で俺を見ていた

龍悟「あっ！いえそのですね!?えっと・・・あははは・・・」

それを見て俺も冷静になったのか、苦笑いで悟空さんに言っていた

悟空「オメェ変な奴だなぁ！」

ニシシっと笑う悟空さんに俺はまた謝りながら話かけた

龍悟「すみません・・・えと・・・お、俺の名前は龍悟って言います」

悟空「龍悟かぁ・・・よろしくな!!」

龍悟「は、はい！こちらこそよろしくお願いします!!悟空さん!!!」

うぉぉぉぉぉ!!!お、俺・・・今・・・憧れだった悟空さんと話をしているぅぅぅぅぅ!!すっげぇぇぇ!!

悟空「そういえば龍悟・・オメェ何で精神と時の部屋にいるんだぁ?オラ何回も使ってんけど、オメェを見たことねぇぞ??」

龍悟「あぁ・・・実は、自分の部屋の所に精神と時の部と書いてあるドアを見つけまして、気になって入ってみたら今の状況に・・・」

うん・・・嘘は言ってない!てか、悟空さんに俺が転生者って言ってもわからないかもだし・・・

悟空「ふぅ~ん・・・まぁいっか!!誰がいても関係ねぇしな!でも、オメェがここにきたっちゅうのはもしかして修業か?」

龍悟「あっはい!自分はまだ戦闘に関しては初心者なもので・・・」

悟空「ならオラと修業しねぇか?オラ、さっきのオメェの気を感じた時に素質があるみてぇだからよ!」

龍悟「えっ・・・い、いいんですか!?」

まじかまじかマジかまじか!?!?あの悟空さんに修業付けてもらえるだと!?!?マジっすか!?!?!?

悟空「おしっ!!んじゃ、さっそく行くぞぉ!!」

龍悟「えっ?ちょっ!?悟空さ!?」

俺の静止の声を聞かずに悟空さんは俺の頬にパンチをかましてきました・・・いきなりなんで避けれる筈もなく・・・

バキッ!!

龍悟「ぐぺぇっ!?!?!?」

悟空「いぃ!?!?」

思いっきり殴られて飛んでいきましたとさ・・・これから俺・・・強くなるのかなぁ・・・泣

第４話　憧れの存在悟空さんとの修業開始！その１

龍悟「あいたたた・・・」

悟空さんいきなりはないっすよ・・・右頬が痛い・・・

悟空「いや～わりぃな龍悟！オラと同じサイヤ人だからでぇじょぶだと思ってつい振り切っちまってな!!」

まるでイタズラが成功したかのような子供の笑顔を俺に向けて言う悟空さんに毒気を抜かれた俺はまぁいいかと思ってしまった

龍悟「いくら俺がサイヤ人でもまだ弱いんですから・・・って俺、悟空さんにサイヤ人って言いましたっけ？」

あれ？説明したかな俺・・・

悟空「オメェ何言ってんだ？その尻のしっぽを見れば分かるじゃねぇか!!」

そう言われて俺の尻を見てみると・・・自由自在に動くしっぽがありました・・・そりゃあ誰だって分かるわ・・・

龍悟「確かに何言ってんだですよね・・・あはは・・・これはしっぽも鍛えないと駄目だなこりゃあ・・・」

悟空「だな!!オラもしっぽがあった時は握られただけで力が抜けちまったからなぁ・・・何ならしっぽ切っちまうか？」

う～ん・・・確かにしっぽがあると弱点になるけど鍛えれば有用になるしなぁ・・・あと、超サイヤ人４になるには絶対に必要だし・・・

よし！

龍悟「いや、しっぽは残しときます！鍛えれば結構役に立つ事が多そうですし」

悟空「ん！オメェがそう言うんだったらそれでいいさ!!だけど気ぃ付けろよ？月を見ちまうと大猿のバケモンになっちまうからな!!」

龍悟「あぁ～そうだった・・・大猿になったら暴れちゃいますもんねぇ・・・」

悟空「そうだな！それでオラは昔、じいちゃん死なせちまったし、オラの仲間にも迷惑をかけちまったからな・・・」

悟空さんが懐かしむ様に・・・しかし、悲しむ様に俺に語ってくれた。俺は原作を知ってはいるが、今初めて聞いた様に話しかけなくては・・・

龍悟「おじいさんをですか⁉？・・・・・・分かりました！極力月は見ないように心がけます!!」

悟空「あぁ！オメェも気ぃ付けろよ？龍悟！・・・さて！修業始めっか!!」

遂に・・・憧れの悟空さんとの修業が今！始まるのだ!!!!・・・っとその前にあれを言っておかないと!!

龍悟「悟空さん！修業の前に質問いいですか!!」

俺は元気よく手を上げながら悟空さんに聞いた

悟空「おっ？なんだぁ??」

龍悟「気ってどうやって出すんですか!?!?」

ドンガラガッシャ～ン!!

龍悟「あれ？どうしたんですか？悟空さん!?!?」

悟空さんが盛大にコケている!?なぜ!?!?

悟空「あ・・・あはは・・・そ、そこからかぁ・・・よっと!!取り敢えず始めっか!!」

なんか、何事も無かった様にされたけど・・・まぁいっか!!

取り敢えず修業の前に気の扱いを教えてもらった。最初は感覚が掴めなくて苦戦してた俺に悟空さんが「あの時オメェが重力に耐えてた事を思い出してみろ!!」と言われ、その事を思い出しながらやってみるとあの白いオーラが出るのを感じ、気の放出が出来た

それに伴い、気のコントロール、気弾の扱いを教えてもらった。最初は苦労したけど手の平から気の球が出た時にはもう最高にめちゃくちゃ喜んだ！はしゃぎすぎて気弾射ちまくって気がなくなって気

を失って悟空さんの気を分けてもらって目を覚ましてソッコー謝ったのはいい思い出です・・・

悟空「よし！気の扱いはでぇじょぶの様だな!!」

龍悟「はい！悟空さん!!」

悟空「そんじゃあ次は、オラの技をオメェに教えてやっかな！ていっても亀仙人のじっちゃんの技なんだけどな!!」

えっ・・・それってまさか!!もしかして!!

悟空「かめはめ波っちゅー技なんだけどよぉ・・・1回見せた方が分かっかもな！見てろよ！龍悟!!」

ふぉぉお・・・ふぉぉおおお!!リアルかめはめ波!!!リアルかめはめ波をこの目で見られるのか!!!!

龍悟「はい！しっかり見て覚えます!!」

悟空「よし・・・はぁぁぁあ!!」

龍悟「っ!?な、なんて気だ・・・」

えっ?・・・この気の量でまだ本気すら出してないの!?!?これだけでもビリビリ痛いくらいに感じるんですが!?!?まじで化け物かよ!?!?!?

悟空「かぁ～・・・めぇ～・・・はぁ～・・・めぇ～・・・波ぁぁぁぁぁ!!!」

悟空さんが両手で球体を持つように前に出したあと、その状態のま

ま腰の横まで持っていくと、そこから青白い気が光を放ちながら集まり、球体になっていく。そして、溜まった気を一気に両手をつき出して開放したその巨大な光線は一直線に向い、徐々に細くなり消えていった・・・

精神と時の部屋にいるため、そもそも障害物がないので真っ直ぐ行って消えていったけど、あれ受けたら堪ったもんじゃねぇなと思った俺氏

龍悟「す・・・すげぇ!!!こ、これが・・・かめはめ波!!!」

悟空「そうだ・・・これがかめはめ波だ！今度はこれを覚えてもらうかんな!!けど、そのめぇに・・・」

うぉぉぉぉぉ!!!俺もやりたいやりたいやりたい!!!!よし！さっそくやるぞぉぉぉぉ!!

龍悟「よぉぉぉぉし！やってやりますよ!!悟空さん!!はぁぁぁぁぁ!!!」

俺は覚えたての気を開放しながらさっき悟空さんがやった構えをして集中させた

悟空「ちょっ!?龍悟オメェ!?まっ」

龍悟「うぉぉぉぉぉ！かぁ～・・・めぇ～・・・はぁ～・・・めぇ～・・・・・・はれぇ？」

ふぇあ～・・・な、なんで・・・ち、力が抜け・・・

バタンッ

悟空「あちゃあ～・・・やっぱりなぁ・・・」

悟空さんが倒れた俺をみてやっぱりみたいな顔をしながら頭に手をのせながら言っていた。しながらじゃなくて完全にしてました

龍悟「な・・・なんで・・・？」

すると、悟空さんが丁寧に説明してくれた。まぁ要するに・・・

悟空「気があんまりねぇのにやるからだぞ？龍悟？」

はい・・・気が全然足りないって事ですね!!今の俺はせいぜい亀仙人が修業つける前の小さかったクリリンくらいしかないと言う事なんですねぇ・・・マジかよ・・・サイヤ人だぜ？俺・・・

いや、確かに戦闘力5だった悟空さんも修業しまくって最強になったんだけどさぁ・・・普通サイヤ人って生まれてすぐにけっこう戦闘力なかったでしたっけ？

・・・でも、確かにサイヤ人にして下さいって・・・超サイヤ人4やゴッドブルーになれるようにして下さいって言う願いを言ったんだよ・・・

そう、なれるようにして下さいだ・・・つまり、最初っから気がでかい訳じゃないし、ましてや、いきなり超サイヤ人にすらなれないのである

まぁ、今後の修業次第で俺が超サイヤ人になれるかなれないかが決まってしまうのである・・・もしくは、一生なれないかも・・・くそっ！これならば、悟空さん以上の気を持ってて、超サイヤ人～超サイヤ

人4・ゴッドブルーまでいつでも変身できる様にしてくれって頼むんだったぁぁぁぁ!!

・・・・・・まぁ、取り敢えず修業してみて俺の限界までやってみるか・・・はぁ・・・せめて、超サイヤ人3まではいきたい・・・いや!!絶対にいってみせる!!!!その為には・・・こんな所で倒れてる場合じゃねぇ!!!!

龍悟「くっ・・・うぅ・・・うぁぁぁ!!」

悟空「んお?」

倒れていた俺の周りに白いオーラが纏わり、風を巻起こしながら・・・ふらふらになりながらも立ち上りながら俺は叫んだ

龍悟「サイヤ人は戦闘民族だぁ!!嘗めるなよぉぉぉぉぉぉ!!!!!!」

ドゴォオン!!と音をたてながら暴風が巻き起こった。ふらふらだった俺の足はちゃんと立ち上がっていた

龍悟「はぁ・・・はぁ・・・はぁぁ・・・」

悟空さんは一瞬驚いた顔をしていたがすぐに元に戻り、ニヤッとしながら言ってきた

悟空「オメェ・・・ほんとおもしれぇなぁ・・・へへっ!ますますオメェを強くして早く闘ってみてぇ・・・」

俺もニヤッとしながら

龍悟「えぇ・・・俺も早く強くなって貴方と闘いたいです・・・」

悟空「フッ・・・んじゃあ、さっそく強くなんねぇとな!!次の修業は「「グギュルルゥウウ・・・」」・・・」

龍悟「・・・・・・」

バシュンッと俺の周りの気が消え、辺りに静粛が訪れた

２人は顔を合わせ笑顔を向けながら

悟空「飯にすっか！龍悟!!」

龍悟「ですね！悟空さん!!」

いろいろあるけど、先ずは飯だな!!!

修業はその後だな・・・

第５話　悟空さんとの修業その２！修行はツライよ・・・

悟空さんと俺は部屋に入り食事をしていた

龍悟「ごぉふふぁんふゅあしぁん！（悟空さんすみません！）ングッ！ご飯いただいてしまって」

悟空「ふゅにふゅんぁひゅうごぉ！ふぉりぇよりもょぉっちょふぇ!!（気にすんな龍悟！それよりももっと食え!!）」

２人のサイヤ人の食欲は凄まじかった。空になった皿で２人の顔が見えないくらい積まれていた

悟空＆ａｍｐ；龍悟「「かぁ～!!食った食った!!」」

飯は旨かった！大満足である！後で聞いたけど、全部チチさんの手作りだと言う。俺も最初は食うのをためらった。俺も食べると悟空さんの残りの分がなくなるのではと・・・

でも、気にすんな！と言われ大量のご飯があったので俺も食べさせてもらった。まぁ、腹もなっちまったからなぁ

悟空「よし！さっそくやるぞ！龍悟!!まず、オメェに足りねぇのは体力と気の量だな・・気のコントロールはオラよりあつけぇがうめぇから教えるのはいろいろありそうだな・・・先ずは重力の修業からいくか！」

龍悟「重力の修業ですか？あぁ～確か俺が最初に入ってきた時に受けたあれか・・・因みに何倍からですか？」

悟空「ん～・・・先ずは１０べぇからか！徐々にならさねぇと修業になんねぇかんなぁ！」

龍悟「分かりました！」

悟空「よし！さっそく行くぞ！」

ポチッ！

龍悟「ぐぅっ!?」

ズゥン!!と体が重くなり片膝を付いてしまった・・・おっ・・・重い!!

悟空「１０べぇでもきちぃだろ？オラも界王様の星に行った時は立つのもやっとだったかんなぁ！」

龍悟「くっ・・・こ、この程度・・・！」

俺は無理にでも立ち上がってみせた。すると、悟空さんはそうこなくっちゃな！と言いながら笑った

悟空「んじゃ！このままオラと闘うぞ!!」

龍悟「えっ？慣れるまで歩くとかせめて動きやすくなるまで待ってくれるんじゃあ・・・」

悟空「なにいってんだオメェ？そんなんじゃいつまでたっても強くなんねぇぞ??それにオラの勘がいってんだ・・オメェはただもんじゃねぇってな！」

悟空さんは本当に勘が鋭い人なんだなぁ・・・薄々転生者ってのをわかってんじゃないかなぁ・・・でも、悟空さんにそこまで言われた

らやってみるしかない!!絶対に悟空さんに勝ってやる!って気持ちでやってやるぜ!!

龍悟「・・・よろしくお願いします!!」

それから何日・・・いや、精神と時の部屋だからもう何十年?か修業してんじゃないんかなぁ?取り敢えず、ざっくり説明すると・・・地獄でした・・・

いや、だってな!?悟空さん全然容赦しないんだもん!!

悟空「たぁりゃあ!!」

龍悟「ちょっ!悟空さん!!おわぁっ!?」

重力であまり動けない俺に普通に攻撃する悟空さんに咄嗟に判断した右手で蹴りを受け止めた。いってぇぇえ!!おっもぉぉい!!すっごぉぉい!!君は戦いが得意なフレンズなんだね!!って違う!!

悟空「へへッ・・・やっぱりなぁ!オメェは勘が鋭いかんなぁ・・・受け止めると思ってたぞぉ!!まだまだ行くぞ!」

龍悟「いぃぃぃぃやぁぁぁぁぁぁ!!」

動けないっつーのに格闘の連打と気功弾の連打・・・１０倍で慣れてきたら１０倍ずつ上がってく重力・・・さらに死にそうになったから仙豆をこっそり食べて回復したのをいつの間にかいた悟空さんにガッツリ見られてて恐怖の言葉を言われたのを今でも覚えてる・・・

悟空「おっ?仙豆じゃねぇか!オメェなんで持ってんだ?・・・まぁいっか!そんな事よりそれ持ってんじゃあもう少し強くやってもも

でえじょぶかな?」

ふふふ・・・最初は聞き間違いかな?って思ったさ・・・でも違かった。その日から更に修業は厳しくなりました○

今では、１００倍重力もへでもありませんよ!!もうめっちゃ動きまくって悟空さんと闘えますとも!!でも悟空さん・・・いくら面白くなったからといって界王拳出さないで下さい!!しかもいきなり２０倍って!!死ぬ!!これじゃあ団まち原作入るまでに死んじゃうううう!!らめぇぇぇぇぇ!!!

瀕死になる度に仙豆を使って回復→悟空さんと戦闘→回復→戦闘の地獄ループでした・・・でも、確かに強くなってはいる。サイヤ人の能力、瀕死の状態で回復すると戦闘力が上がるって言うけど本当だったんだなぁ。確かに瀕死になって回復すると強くなってるのが感覚で分かる

俺もあの悟空さんの攻撃（界王拳２０倍状態）を少しずつだけどガード出来てるし、舞空術も戦闘中に覚えて使いこなしてるのを悟空さんは驚きながらも少し口角を上げた後に気にせずに戦ってたし・・・

あっ!そういえばあの高速で移動して戦うの俺も出来ました!!出来るかなぁと思ってやったら悟空さんのお腹に一撃与えられたのを今でも覚えてる・・・まぁ、直ぐに背後に周られて両手でガッチリ掴んだ殴りで地上とキスしてしまったがな!!

そんなこんなで色々地獄の・・・じゃなかった楽しい修業は終わりを迎えようとしていた

悟空「龍悟!オメェ強くなったなぁ!!オラも何発かいいのもらっちまったぞぉ!!」

龍悟「はい！これも悟空さんのお陰です!!ありがとうございます！」

悟空「そおう固くなるなよ!!オラに敬語なんていんねぇぞ？」

龍悟「はい、あっいや、分かった悟空さん！せめてさん付けだけは許してほしい」

悟空「ん～・・・分かった！」

悟空さんにため口って恐れおおいんだどねぇ・・・まぁ慣れるしかない

悟空「所で龍悟！オラもうそろそろけぇらなきゃいけねぇんだ・・・」

龍悟「えっ？あっ・・・そうですよね・・・いつまでもいる訳じゃないですもんね・・・」

せっかく地獄だと思ってた修業が楽しくなってきたのに・・・って何いってんだ俺!?あれ!?まさか、サイヤ人の本能が戦いを求めてるのか!?

悟空「そう落ち込むなって！またオラも修業しに来るからよ!!」

龍悟「悟空さん・・・ありがとう！その時はまたよろしく頼みむぜ!!」

悟空「だけど、行く前にオメェにオラの技を教えてやる。オラはオメェならこの技と姿ならなれるって信じてっからな!!」

悟空さんが俺に教えたい技と姿だって・・・・・・・・えっ？・・・・まさか・・・

悟空「オメェはオラの界王拳もものにしたかんなぁ・・・界王様も驚くだろぉなぁ!!」

そう!!必死の激闘により俺は悟空さんの界王拳を見て覚えてしまったのだ!!・・・いや、見て覚えてたってか原作で知ってるから試しにやったら出来たって話で・・・えっ？何倍まで・・・？２０倍までですが？ドヤァ!!

ふぉぉお!?キーン・・・ドカァンッ!ドヤ→ガォ←ウザ→イデスゥ←

・・・はっ!?な、なんか筋肉モリモリマッチョマンの変態サイヤ人に岩盤に押し付けられたような・・・

第6話　いきなりの戦闘!?ちょっ!?まっ!?

悟空「んじゃあ、まずは技から教えっぞぉ？オラの真似をするんだぞ？」

もう言わなくても分かるよね？悟空さんには、あの伝説のかめはめ波と何故か元気玉も教えてもらいました！かめはめ波はすぐに習得出来たけど、元気玉はやり方だけ教えてくれました。悟空さんによると精神と時の部屋には俺達以外に生きてるものが少なすぎるからしい。

悟空「まぁ、龍悟だったらすぐ覚えれるだろぉ！気の扱いはうめぇかんな！それともう一つは……ハァァア!!」

悟空さんはいきなり力を入れると、眩く光、風が荒々しく吹き荒れた。俺は、とっさに両腕を庇い暫くしてから悟空さんを見た……やっぱり、超サイヤ人だ!!

悟空「これが超サイヤ人……優しい心を持ちながら激しい怒りによって目覚めた伝説の戦士……らしいぞ？」

うわぁ……超感動するんだけど…!?黒髪から変身すると逆だった金髪になり、瞳は黒からエメラルドグリーンに……更になんと言ってもこの威圧感と莫大な気の量!?!?ハンパない……

龍悟「超……サイヤ人……」

悟空「そうだ……オラもこの力をものにするのには苦労したんだけどな？だけんどよぉ……オメェなら絶対になれるってオラの感がそう言ってんだ」

龍悟「悟空さん……はい!!なります……絶対になってまた悟空さんと闘いたいです!!」

悟空「あぁ……オラもだ……ふぅ……オラはもっともっと強くなる。だからオメェも、もっともっと強くなれ!!次に闘うんがたんのしみだなぁ〜〜!!」

そう言った悟空さんは、精神と時の部屋のドアに手をかけながら後ろを振り向いて俺に向かって「じゃあな！龍悟！またな!!」と言って俺が返事をした後、去って行った……

龍悟「いや〜……まさか悟空さんがいる精神と時の部屋とは……びっくりしたなぁ……でも、貴重な修行が出来たんだから良かったぜ!!……だけど、あの悟空さんってどのくらいまで変身出来るんかな？フリーザ編が終わってると思うから人造人間編に入る前とか？いや、でもそしたら悟飯ちゃんがいるはずだけど……まぁいっか!!難しい事は分かんね!!」

取り敢えず、今試したくてウズウズしてる……よし!!

まずは、両腕を前に出しながら……

かぁ〜〜〜……

両腕を何かを掴む様な形にして合わせて……

めぇ〜〜〜……

そして、そのままの形で腰にまで持って来て……

はぁ〜〜〜……

気を溜めて……溜めて……

めぇ～～～……

放つ!!!

波ぁぁあああああ!!

すると、俺の両腕から青白い極太の光線みたいなのが勢いよく放たれていた。そのまま真っ直ぐに飛んでいき徐々に光線が細くなり途切れた。

……ふぉぉおあああ!?!?出来た!?出来たできた!?!?あの憧れのかめはめ波が出来ましたぁぁぁぁあああ!!!やっべ!!マジヤベェかめはめ波!!転生前は全然てか絶対に出来ないんだけど密かに練習してたかめはめ波がこの転生で出来たんだぁぁあああ!!イヤッふぅぅううう!!

……えっ？今黒歴史言ってたって……？……忘れろ!!今すぐ忘れろ!!!忘れなかったら俺の全力かめはめ波撃つぞ!!!

はぁ……はぁ……と、取り敢えずかめはめ波は撃つ事が出来た……次は、超サイヤ人だ!!

閑話休題

何の成果も……得られませんでしたぁぁぁぁ!!!

って何でだよ!?!?何でなれないん!?!?た、確か激しい怒りによってだからベジータさんやバーダックさんみたいに情けない……情けない!!って自分の力の弱さに怒るみたいにやってみたんだけどダメだった!!ていうか…まず、怒りより楽しいが勝ってるから変身出来ないんだと思う……プライドとか無いからなぁ……俺……

うん!!いつかなれる!!多分、ダンまちのオッタル……だったか?が確か、レベル7とかだからもしかしたら俺より強いかもしれない!!俺には経験とかないし……気楽にやってくしかない!

龍悟「さて、俺も精神と時の部屋から出るか」

そう言って俺は、ドアを開けて自分の部屋に戻って行った……あれ?確か、悟空さんも同じ所から出てったよな?って事は悟空さんもダンまちの世界にいる!?……な訳ないよね!悟空さんの気、全然感じないもん!!う~む、精神と時の部屋は謎が多いですな……

龍悟「来たぜマイハウス!!まずは飯!!……って言いたいけどもう無いんだよねぇ、食材……と言うわけで仙豆だ……食え……」

仙豆が入ってる壺から一粒取り出して食べる。カリッ!ゴクンッ

！よし!!腹はいっぱいになったけど、やっぱり料理食いてぇ……チャントカメヨ……ん？何か聞こえた気が……気のせいか！

龍悟「さぁって……まずは、ここが何処かだな？取り敢えず、ドアオープン!!」

ドアを開けたその光景は……!!!

一面緑だらけの森でした。ありがとうございました。……はぁ、誰もいないパターンだったか……つか、オラリオじゃないし、森かよ……仕方がない!!誰かいないか気を探って見よう!!

う～～～む……ん？遠いけど、２人分の気を感じる……しかも、強いかも…ちょっと行ってみるか!!舞空術だと、怪しまれるから走って行こう!!

ティオネ・ティオナ　サイド

ティオナ「ねぇ～え～ティオネぇ～！歩くのつ～か～れ～た～!!おぶってよぉ～～!!」

ティオネ「あぁぁあもぅウッサイわね！ティオナ!!黙って歩きなさい!!」

全く、依頼を終わらせたのはいいんだけど、コイツが駄々こね始めちゃってやんなるわ。私だって早く帰ってご飯食べたいわよ!!

ティオナ「ぶぅ～～！……ていうか今回の依頼も楽勝だったねティオネ!!なんか、レベル５くらいの強い盗賊の男だとか言ってたけど全

然弱かったね？」

ティオネ「そうねぇ？聞いた割にはつまんなかったわねぇ……少しは楽しめると思って素手で勝負したってのにたった2～3発でやられるんだもの。男って軟弱くよねぇ～」

ティオナ「きっと依頼主が話を盛ってたんじゃない??」

ティオネ「可能性は高いわね……ったく、団長も団長よ！なぁにが、「僕の親指が反応しないって事は大した依頼じゃない…けど、報酬はいいから2人共行ってきて？」よ!!あの時、憂さばらしにダンジョン行こうとしてたのにぃぃぃぃ!!!」

ティオナ「ねぇ～……ん？ティオネ!!」

ティオネ「分かってる……誰かこっちに来る……この速さ……只者じゃない……」

ティオナ「っ!?来た!?!?!」

ティオナが喋った瞬間、見たこともないオレンジ色の服装をした男が前からもの凄い速さで走って来たのにも関わらず疲れもみせていない様子でしかも、変なポーズで私達の前に立ち止まった

ティオナ・ティオネ「……」

男「……!?」

警戒する私達を見てその男は何故か一瞬驚いた顔をしていた。気付いてる……私達がロキ・ファミリアの団員だって事を……って事は……敵!!

ティオネ「ティオナ！行くわよ!!」

ティオナ「了解！ティオネ!!」

流石、私の妹!!こういう時はホント頼りになるわね!!

男「うぇっ!?ちょっ!?まっ!?」

相手が静止をかけてくる……でも、聞かない!!だって……あんなに闘志が漏れてるんだもの!!最初から闘う気満々だったってことでしょ!!油断なんかしない……全力で叩き潰す!!話はそれからね!!